

大人が使う終助詞と子どもの応答の関係について

鈴木 絵理子

(東京学芸大学 研究生)

【研究目的】

TBSラジオ番組「全国こども電話相談室」を聴取すると子どもの応答の大部分は「うん」「はい」といった肯定的な応答である。しかし、この番組は決められた時間内に子どもの質問に回答しなければならず、回答に十分な時間は与えられていない。子どもは、本当に回答者の回答を理解し、疑問を十分に解消しているのだろうか。

また、回答者の回答表現において文末に「～ね」「～よ」というような多様の言い回しが使われている事に気づく。文末につく言い回しを終助詞と呼ぶ。終助詞の機能は「対人関係に関与するもので日本語の感情表現につながるものである」⁽¹⁾

このような回答者の回答表現と子どもの応答は関係があるのか。本研究においては大人が使う終助詞の果たす役割と子どもの応答の関係について明らかにする。

【研究方法】

番組分析 分析対象番組：TBSラジオ番組「全国こども電話相談室」

録音期間：H 7 年12月25日～H 8 年10月 8 日
の無作為に抽出した50日間

分析対象：録音期間内に質問を寄せた

4 歳、5 歳 6 歳、小学1年生
の質問20件

本研究は泉子、K.、メイナードによる「会話分析」のデータ記述、更に海保博之・原田悦子による「プロトコル分析」のデータ記述を参考に分析を行なった。

【結果及び考察】

本研究では回答の際、回答者が子どもに対して使う終助詞はどのようなものか、また、その頻度を調べた。

終助詞	ね	の	よね	よ	のね	でしょ	かな	か	のよ
回数	49	34	34	29	21	18	17	12	4

回答表現において使用されていた主な終助詞は上記した9つであったが、本研究では機能が疑問表現であると明らかである「か」「かな」、疑問の場合に使われていた「の」を除き、上記した7つの終助詞の会話における機能を検討する。

初めに「ね」「よ」について検討する。

益岡は『我々は言葉を使う時、聞き手が特定の話題についてどの程度の知識があるかを考えに入れながら話を進め、場合によっては言語形式を変える。』という田窪の言葉を引用した上で「聞き手の知識に対する話し手の考慮という点が終助詞「ね」と「よ」に深く関わっている⁽²⁾」としており、終助詞「ね」と「よ」それぞれの会話における機能は、大別して以下の2種類の対話文において変化するとしている。

1. 話し手の知識を聞き手に情報として伝える
演述型の対話文
2. 命令・禁止・依頼・勧誘を表現する
訴え型の対話文⁽²⁾

上記した益岡の定義を基に回答場面において回答者が子どもに対して使用した終助詞「ね」と「よ」を、演述型の対話文で使用されているもの、訴え型の対話文で使われているものに分類し、頻度を調べた。

- ・演述型 63回 (「ね」37回 「よ」26回)
- ・訴え型 8回 (「ね」5回 「よ」3回)
- ・その他 7回

この結果から回答者が使う終助詞「ね」と「よ」はどちらも演述型で使われることが多いことが明らかになった。この結果は、研究対象とした番組が基本的に子どもが分からないことを回答者が教えるという形式であることから当然であると言える。

この結果から演述型の対話文について更に検討する。

益岡は「演述型の対話文において、我々は自分が持っている知識を聞き手に伝えるに際して、聞き手が持っている想定される知識のあり方との異同を判断し、それを表明するということがある。」⁽²⁾と述べ、次のように定義づけている。

「ね」は話し手の知識と聞き手の知識が一致すると判断され、同意を求める場合に用いられる。
(以下「演述・一致型」と記す)

「よ」は両者の間にずれがあり、その意味で両者が対立的な関係にあると判断される場合用いられる。(以下「演述・対立型」と記す)

以上の「ね」と「よ」の機能を基に次に「の」「のよ」「のね」について検討する。

・空気の中で曲がる性質を持っている「の」

事例から「の」は断定的な言い回しであり、聞き手への配慮は感じられないという事を読み取れる。終助詞「の」に聞き手への配慮が顕著に表れる「ね」と「よ」合わせてみると以下ようになる。

・空気の中で曲がる性質を持っている「のね」

・空気の中で曲がる性質を持っている「のよ」

この結果から終助詞「の」は「ね」または「よ」と一緒になり「のね」「のよ」という複合形になることで聞き手への配慮が伴うということが考えられ、「のね」「ね」と、「のよ」は「よ」と同様の機能を持つと考えられる。

次に文末詞「よね」について検討する。

・体の中に筋肉ってゆうのがある「よね」

・体の中に筋肉ってゆうのがある「でしょ」

事例からもわかる様に終助詞「よね」と「でしょ」は置き換えても機能が変化せず、同様の機能を持つと言える。終助詞「でしょ」について田窪・金水は「話し手の知識状態を示し、聞き手への質問・確認の機能を持つ」⁽⁹⁾としている。「よね」「でしょう」に「話し手の知識状態を示す」という機能が働くのは「よね」が「よ」と「ね」の複合系の終助詞であり、「ね」の持つ機能が働くためである。

前述した様に「のね」「のよ」は「の」と「ね」と「よ」の複合型であり、「よね」「でしょ」は前述した様に「ね」と同様の機能を持つと考えられる。また、研究対象とした終助詞は番組の回答場面では基本的に演述型の対話文において使われている事が明らかになった。この結果から各々の終助詞を「演述・一致型」「演述・対立型」の2つに分類することができる。どちらにも当てはまらない「の」は中立型とした。使用回数は以下の通りである。

・一致型	ね、のね、よね、でしょ	122回 (64.5 %)
・対立型	よ、のよ、	33 回 (17.5 %)
・中立型	の	34 回 (18 %)

この結果から、回答場面においては、「演述・一致

型」つまり、「知識が基本的に一致すると判断し、同意要求の機能を持つ」終助詞が多用されていることが明らかになった。回答者は子どもと基本的に知識が一致すると判断しながら回答を行っており、その際には同意の要求を行なっているという事が言える。

しかし、回答者が「演述・一致型」の終助詞を回答場面において多様することは、子どもの理解が中途半端なままに終わり、大人の「理解」と子どもの「理解」にずれが生じる可能性がある。

回答者は子どもの応答、相槌を子どもの理解の判断基準としており、同意要求の機能を持つ終助詞を多用していると考えられるが、子どもが本当に理解して肯定的応答をしているとは限らない。

バーンスタインが「就学前の子どもは自分の言ったことが理解されない場合に伝達情報を修正するのはそれほど上手でない」⁽⁴⁾と述べている様に、子どもは、回答者の説明、回答が、自分の意向に沿うものでなくても、それを上手く伝えることができずにいる事も考えられる。また、滝沢が「幼い子どもは、大人が優れた能力を持ち、そのためになんでも理解してくれると信じている」⁽⁵⁾と述べている様に、子どもが、回答を無条件に正しいと思う場合もある。

研究対象とした番組には、決められた時間内に回答するという制限があるため、「子どもが理解した」との判断基準は、子どもの応答のみに頼られるという可能性も考えられるが、大人が子どもの疑問に回答する場合、十分に子どもの意向を確認しなければならないと言える。

【引用文献】

(1) 泉子, K. メイナード

「会話分析」くろしお出版 1993年

(2) 益岡 隆

「モダリティの文法」くろしお出版 1991年

(3) 田窪 行・金水 敏

「対話と共有知識」『月刊言語』25巻1号
大修館書店 1996年

(4) D. K. バーンスタイン

「子どもの言語とコミュニケーション」東信堂1994年

(5) 滝沢 武久

「子どもの思考の働き」大日本図書 1965年